❖「戦争が好きでたまらぬ男」

日本軍人のなかで、最も〝数奇な生涯〟〝波瀾万丈の人生〟を送った軍人といえば、辻政信がまずその筆頭だろう。しかも彼の活動は、戦前・戦中にとどまらない。その特異な経歴は、実に戦後にまでひきつがれている。

なかでも、敗戦とともにタイで僧侶となって身を隠し、さらに地下に潜行した経緯を綴った『潜行三千里』（一九五〇年刊）が爆発的な売れ行きを見せると、戦前のはなばなしい経歴も手伝って、辻は一躍国民的な人気を得る。

その人気は、辻を国会議員へと押し上げていくが、一九六一（昭和三六）年九月、現職のまま戦乱の地のラオスで行方不明になってしまう。このことがまた〝辻伝説〟にいっそうの拍車をかけ、「陸軍が生んだ最高の秀才」「部下思いのスーパーマン」「不死身の男」といった、現在でも辻を英雄視する見方を生み出している。

辻は、陸軍にあって作戦計画の立案・指導を担当する作戦参謀畑を主に歩いたエリート将校だった。しかし彼は、ほかの参謀たちと違い、自分の立案した作戦の現場に足を踏み入れ、現場の指揮官顔負けの指揮ぶりまで発揮する。それは参謀の職域からはみ出したものであったが、その大胆不敵で果敢な行動力が、しばしば部隊の窮地を救うこともあっ

た。

その辻の戦歴は、何人もの辻がいるのではないかと思えるほど、実に広範囲にわたっている。ソ満国境付近でソ連軍と戦ったノモンハン事件をはじめ、マレー・シンガポール攻略作戦、ガダルカナル島奪回作戦、ビルマ進攻作戦などがそうだ。中国戦線では、支那駐屯軍に派遣されて中国華北地域への進攻作戦の指導にもあたっている。主要作戦を立案し、激戦地を縦横に駆けめぐったその戦歴の一面だけを見れば、まさに戦争冒険小説のヒーローであった。

石川県の寒村に貧しい農家の六人兄弟の次男として生まれた辻は、陸軍士官学校を首席で卒業（第三六期）した。軍事専門書と刀剣の収集以外にこれといった趣味のなかった辻は、上司と同僚には批判的な態度で接することを常としたが、部下にはめっぽう思いやりがあったという。行軍練習のとき、疲労して倒れそうな兵士がいると、その兵士の銃を担ぎ、休憩時には部下全員にキャラメルを配って励ましたこともあった（生出寿『作戦参謀辻政信』）。

その一方で、これらとまったく逆の評価もある。たとえば、辻の上官であった池谷半二郎は、辻を評して「不死身で戦争が好きで好きでたまらぬ男で、師団、軍参謀としてはうってつけ」の人物だったと述懐する（『ある作戦参謀の回想手記』）。たしかに辻は、戦争の臭

いを敏感に感じ取り、戦場にいちはやく駆けつける。そこでは、強引とも思える作戦指導で、多くの犠牲をもかえりみることなく、ひたすら戦功をあげることに血まなこになる。それは、常に獲物を求めて戦場を走り回る「戦争屋」としての側面を思わせる。

また、シンガポール攻略作戦を担当した第二五軍の司令官・山下奉文は、辻を「この男やはり我意強く、小才に長じ、いわゆるこすき男にして国家の大をなすに足らざる小人なり」と手厳しく評している（生出寿前掲書）。辻は統制派に属して東条英機に信頼が厚く、反対に山下は、東条とは犬猿の仲にあった皇道派の幹部的存在であったから、その評価をことば通りには受け取れないかもしれないが、この種の証言は少なくない。

辻は、本当にたぐいまれな「傑物」で「英雄」だったのか。それとも、戦争が好きでたまらない「戦争屋」で「国家の大をなすに足らざる小人」にすぎなかったのか。いずれの評価がその実像に近いのか。それに答えることは、同時に日本軍隊の実態の一端にもせまることになるはずだ。まず、辻がかかわった作戦指導のいくつかを追ってみることから始めよう。

※「中央を恐れず、ソ連をも恐れず」

一九三七（昭和一二）年七月七日の盧溝橋事件に端を発した日中全面戦争の開始は、当

時、中国東北部の新京（現在の長春）に司令部を置く関東軍の首脳たちに、対ソ戦準備への影響を懸念させることになった。関東軍は、将来確実に予測された対ソ戦の主力部隊として、同地域に配置された日本軍最強の外地軍隊である。

それより先、一九三二（昭和七）年三月、その関東軍の工作により中国東北部に建設された「満州国」（首都・新京）と、蒙古およびソ連との国境地帯では、断続的に国境紛争が起きていたが、盧溝橋事件から一年たった一九三八（昭和一三）年七月、朝鮮・満州とソ連の沿海州との国境に位置する張鼓峰で日ソ両軍の衝突事件が起こる。これは、急きょ朝鮮から派遣された第一九師団を主力とする関東軍が、航空兵力と機甲部隊からなるソ連軍とまじえた本格的な戦闘となった。

この張鼓峰事件は、日中全面戦争以後、その間隙をぬってソ連軍が中国東北部に武力進攻する危惧を抱いた関東軍が、ソ連の意図を探る目的で仕掛けた戦闘であった。戦闘の結果、日本軍は、第一九師団だけで死者五二六名、負傷者九一四名を出し、死傷率二一％という壊滅的な損害を受ける。

その前年一一月、関東軍司令部に作戦参謀として着任していた辻政信は、張鼓峰事件における関東軍の対ソ作戦準備が不徹底であったことを教訓とし、将来の国境紛争にそなえて、文書で関東軍の行動方針を明確にしておく作業に乗り出した。辻自身の著作『ノモン

ハン』によれば、それまで軍中央が関東軍に課していた任務は、「侵されても侵さず」であったが、関東軍は「侵さず侵されず」を伝統的な方針としていたという。これは、トーンこそ違え、軍中央でも関東軍でも、当面は満ソ国境付近では事を起こさず、守勢の方向でのぞもうとする方針がかかげられていたことを示すものであった。

しかし辻は、「中央を恐れず、ソ連をも恐れず」の姿勢で自らの方針を突き進めようとする。この場合の「中央」とは陸軍省と参謀本部のことで、辻の眼中にはすでに軍中央や日本政府の存在はなく、ただひたすらソ連軍打倒への信念だけが彼の頭を支配していたのである。

この時期の軍中央の対ソ基本方針は、当面のあいだは中国戦線に全力を傾け、一段落をつけたあとで、国家総力戦体制の整備を待って攻勢に転ずる方針であった。しかし、ソ連軍と直接対峙する関東軍は、軍中央の消極的方針に飽きたらず、軍中央の対ソ姿勢の見直しを迫る意味でも、機会があれば攻勢に転ずる構えでいた。そうした関東軍の姿勢を、辻参謀は一身に代表していたと言える。そのため、関東軍首脳は、辻の行動を黙認していく。

一九三九（昭和一四）年四月、辻が起案し、関東軍司令官・植田謙吉大将の名によって関東軍の各部隊に通達された「満ソ国境紛争処理要綱」は、辻に代表される関東軍の対ソ

姿勢をはっきりと文章化したものであった。そこには、「一時的に『ソ』領に侵入し、または『ソ』兵を満領内に誘致滞留せしむることを得」と明記され、「一時的」という限定をつけながらも相手国への侵入を許し、「国境線明確ならざる地域に於ては防衛司令官に於て自主的に国境線を認定して之を第一線部隊に明示」するとして、国境地帯に駐屯する司令官が任意に国境線を決めてよいとした。

これはまったく、日本政府の外交権や、相手国の主権を無視した内容であった。辻は関東軍を、まるで独自の外交権と統帥権とを与えられた独立した軍隊組織か、あるいは独立した「国家」のようにみなしていたわけである。そこには、出先軍隊の独断暴走の危険に対する配慮は、みじんもなかった。

それだけではない。「万一紛争を惹起せし時は任務に基き断乎として積極果敢に行動し其の結果派生すべき事態の収拾処理に関しては上級司令部を信頼し意を安んじて唯第一線現状に於ける必勝に専念すべし」と記して、戦闘が開始された場合には、現地の指揮官は結果を考える必要はなく、ただ勝利に向けて戦闘に集中するようにと説いた。

これでは、国境正面にあってソ連軍打倒の機会をうかがい、功名を挙げようと躍起になっている現地各部隊の指揮官を挑発しているようなものだ。しかも、責任を負う心配はないのだから、勝手放題ということにもなる。ここから、ソ連軍との戦闘を再び開始する素

地が用意されていく。

「要綱」は関東軍から参謀本部に通知された。参謀本部も「要綱」の存在を確認したが、これほど重大な越権行為を明記した文書を参謀本部が否認した形跡はない。この場合も、事実上の黙認である。

戦後、この「要綱」の取り扱いをめぐっていくつかの証言が出されたが、これほど重大な内容を黙認した理由には、軍中央と関東軍が、手段と時期こそ違え、いずれは対ソ攻撃を実施するという点で、基本的には一致していたという事実を見逃せない。そこには、「満州国」を対ソ戦争の前進拠点にして極東ソ連軍をたたき、ソ連領沿海州地域の軍事占領を果たすという目標が底流に存在していたのである。したがって、事件関係者の多くが証言するように、現地と軍中央との連絡体制の不備や軍中央の方針の不徹底といった程度の問題では決してない。この、軍中央の、あるいは日本帝国主義の侵略的意図こそ、関東軍の独走を結局は許していく根本の理由だった。

※関東軍独走の背景

一九三九（昭和一四）年五月、「満州国」と外蒙古・ソ連との国境地帯にあるノモンハン付近で始まった戦闘は、関東軍隷下の第二三師団（師団長兼西域防衛司令官・小松原道太郎中

将）が主力となった。ソ連軍と協力するモンゴル軍との小ぜり合いが始まると、小松原師団長は各部隊の隊長を集め、先に通達を受けていた「満ソ国境紛争処理要綱」の主旨を各指揮官に徹底させ、積極行動に出るよう指示する。これには、参謀次長・中島鉄蔵から、植田関東軍司令官宛に「軍の適切なる処置に期待せられあり」とする内容の電報が伝えられていたこともあった。この電報こそ、軍中央が事実上「要綱」の主旨を是認するものであった。

第二三師団の攻勢作戦は、第六四連隊（連隊長・山県武光大佐）の出動によって開始される。しかし、圧倒的な兵力と火力を動員したソ連軍によって、同連隊の捜索隊（隊長・東八百蔵中佐）二〇〇名が全滅してしまう。辻は、司令部から、作戦指導にあたるため現地ノモンハンに飛んだ。その辻の作戦指導は、最初から、ソ連軍兵力の情勢把握が甘く、一個連隊規模の攻撃で十分に勝利を得られると見込んでいた。ところが、ソ連軍は近代装備を持つ相当規模の兵力を動員配置していたのである。

この敗北を機会に、関東軍内部では慎重論が出はじめる。辻の上司にあたる寺田政男大佐（第一課・作戦担当）は、国際政治上の批判を回避する意味でも静観することが得策だと主張する。しかし結局は関東軍の強い決意を示す意味でも、引きつづき攻勢作戦を新たに用意すべきとの辻の強硬論が大勢を占める。

こうして辻が立案した作戦計画の骨子は、「軍は越境せるソ蒙軍を急襲殲滅し其の野望を徹底的に破摧(はさい)す」というものであった。しかし、「越境」して攻撃をかけたのは関東軍であり、国境の変更を武力で迫ろうとしたのは、ほかならぬ関東軍だった。この強硬策は、辻自身の作戦指導の失敗を覆い隠すものでしかなかったのである。

一時検討された最精鋭師団の第七師団投入案は撤回されたものの、新たな攻撃計画は、関東軍の飛行集団主力（約一八〇機）と第一戦車団（約七〇両）を含む一個師団半の規模の兵力を動員して、一挙に決戦を挑もうとするものであった。

この兵力動員計画は、作戦計画の中止を求められる可能性があったため、植田司令官や、関東軍参謀長・磯谷廉介中将ら軍首脳の判断で、軍中央には内密とされた。これが実行に移されれば、完全な関東軍の独走であり、統帥権の干犯行為であった。しかし、この作戦計画はまもなく軍中央に知れることになる。それは、関東軍の独走に強く反対していた片倉中佐（関東軍第四課）が、業務連絡のために東京に出張したさい、陸軍省軍事課長・岩畔豪雄大佐に漏らしたからだ。

陸軍省では岩畔や西浦進中佐（軍事課高級課員）らが、関東軍の作戦計画の即時中止を強硬に主張していたものの、参謀本部の第一部長（作戦担当）・橋本群中将と同第二課長・稲田正純大佐とが、兵力の限定使用に同意する旨の発言を行なう。事実上、関東軍の攻撃計

画の承認である。それをさらに陸軍大臣・板垣征四郎中将が容認したため、辻の作戦計画は発動されることになる。

軍中央としても、関東軍が張鼓峰で敗北した経緯から、ソ連軍に弱みを見せることは、日本軍の威信低下に拍車をかけるものと考えていたのである。こうした、軍中央と関東軍首脳みずからのメンツへのこだわりが、さらに大きな敗北を準備することになる。

❖ノモンハンの敗北

軍中央の承認をとりつけることに一応成功していた辻であったが、予定の作戦計画のすべてを関東軍司令官に明らかにしようとはしなかった。辻は、作戦の効果をあげるには航空機によるソ連軍基地の爆撃が必要と考えており、ひそかにその準備を進めていた。

しかし、これも軍中央に漏れる。地上戦ならともかく、相手国領内に侵入しての爆撃はどう見ても侵略の意図のあることを公言するようなもので、これには辻の作戦計画に承認を与えていた軍中央もあわて、中島参謀次長名による爆撃中止勧告の電報を発し、さらに作戦課の有末次中佐を派遣して爆撃中止を直接伝えようとした。

これを知った辻は、六月二七日にその機先を制するため、予定を繰り上げてノモンハンからハルハ河を越えた外蒙地区にあるタムスクの空軍基地を空襲する。戦後、辻はこの時

のことを、「任務遂行上の戦術的手段として、軍司令官の権限に属するもので、別に大命を仰ぐべき筋合いではないと判断したのである」（辻政信前掲書）と記している。

いくら交戦状態にあるとはいえ、外国への越境爆撃を、大命を待たず、出先の軍隊が独自の判断で強行することなど、ふつうならとうてい考えられるはずはない。ところが辻には、何のためらいもなかったようである。それだけでなく、つづけて、「寧ろ、中央部に黙って敢行し、偉大な戦果を収めてから、東京を喜ばせてやろうというような茶目気さえ手伝ったのである」（同前・傍点筆者）と述懐している。

ここにも、目先の勝利にとらわれ、空襲によってソ連軍との間にいっそう深刻な緊張関係が生み出され、国際的にも日本の孤立化を招く恐れのあることへの配慮は皆無であった。いわば、手柄をあげることで威信を取り戻し、関東軍の名を高めることのみが辻の頭を支配していたのである。そこには、傲慢で視野が狭く、その行動から生じる結果には無頓着な無責任さがむきだしになっていた。

さて、タムスク爆撃の報告を受けた軍中央は、関東軍首脳部を激しく叱責し、以後独断の行動を慎むことを厳命した。が、辻も含めて、統帥権干犯の責任への処分はいっさい行なわなかった。それどころか、これ以後においても辻の拡大論が他を圧倒し、合計一二〇門を装備した砲兵団の投入や、第六軍（司令官・萩州立兵中将）の新設によって攻撃を強化

していく。しかし、その結果は、ソ連軍との戦闘を激化させ、第二三師団が全滅に近い損害を受け、戦死者だけでも約一万八〇〇〇名という大量の犠牲者を出して完全な敗北に終わった。

九月三日、参謀総長は関東軍司令官宛についに、「一、情勢に鑑み大本営は爾後ノモンハン方面国境事件の自主的終結を企画す、二、関東軍司令官はノモンハン方面に於ける攻勢作戦を終始すべし」を骨子とする大命（陸軍命第三四九号）を発した。ここに来てようやく、軍中央は敗北を認め、手を引くことを決心したのである。関東軍としても多数の指揮官を失い、ほとんどの部隊が戦闘能力を欠いて作戦の継続は不可能であった。現実には、敗北した残存部隊を戦場からどうやって離脱させるかが緊急の問題となっていた。

※問われなかった責任

日本軍が、張鼓峰事件をはるかにしのぐ大敗北を喫した原因は、辻参謀に代表されるように、終始、楽観的見通しに立ち、ソ連軍の圧倒的な火力への対応を欠いた作戦計画に固執したことにあった。辻らは、ソ連軍がヨーロッパ正面にその主力をさかれ、ソ連の輸送能力からしても極東ソ連軍がそれほど強化されているとは考えていなかった。それは、日本軍の情報収集能力の貧弱さが招いた失敗でもあったのだ。

もう一つの理由は、対中国戦争とは比較にならない火力主体の近代戦への認識を欠いていたことである。しかも、この経験は教訓化されず、のちに米軍との戦闘にも生かされることはなかった。近代戦においては、平地での戦闘の場合、火力と機動力の効率的な運用が勝敗のカギとなるはずだ。その両方で劣勢にあった日本軍は、対ソ戦においても、夜襲戦法による白兵戦で一時的勝利を獲得するのが精いっぱいの状況であった。

しかし、それ以上に問題だったのは、責任の所在である。ノモンハンの敗北の結果、軍中央の統制に服さず統帥権を犯したとして、関東軍司令官の植田謙吉大将と参謀長磯谷廉介中将が、その職を解かれ、予備役編入となった。さらに軍中央では参謀次長・中島鉄蔵中将と参謀本部第一部長・橋本群中将が待命処分となるなど、軍首脳者がことごとく人事移動の対象となった。

一方、戦場で戦った指揮官にも苛酷な運命が待っていた。勝手に戦場を離脱したという理由で自殺を強要されたり、更迭を聞いて自殺した連隊長もいた。さらにソ連軍の捕虜となり、送還されてきた将校たちは、軍法会議にかけられて自殺に追い込まれもした。

ところが、対ソ侵攻のシナリオを書き、あおりたてた、事実上第一の責任者であった辻参謀は、第一一軍（在漢口）司令部付に転任したにすぎなかった。しかも、一年後には参謀本部の作戦課に〝栄転〟し、南方作戦担当参謀としてマレー・シンガポール攻略作戦を

指導する。

どうしてこんなことになったのか。それは、日本軍隊の特質として、幕僚（参謀）に絶大の権限を与える反面、その責任は上級者が負うという構造が出来上がっていたからである。つまり、辻がどれだけの権限を振るったにせよ、形式的な地位は一幕僚にすぎず、結果責任はすべてその上司である司令官と指揮官が負い、作戦が失敗した場合でも責任を問われないという構造である。こうした日本軍隊の無責任体制が、いたずらに戦線の拡大と犠牲を大きくしていったともいえる。

陸軍大学校を優秀な成績で卒業した幕僚層は、指揮官としての経験を積む隊付の期間はほんのわずかであった。それ以外は、軍中央の要職と朝鮮軍や関東軍のような主要な外地軍隊の参謀職を経験するだけで、少佐・中佐などの佐官クラスで絶大な権限を行使できる立場にあった。それが、軍のトップ・エリートとしての尊大な態度と、独善的で視野の狭い軍人精神を身につけることにつながっていく。そうした傾向は、作戦指導の面にも表われてくる。その典型的人物が、ほかならぬ辻であった。

もう一つの問題として、戦争指導体制における作戦部門の優位性という問題がある。本来、国家総力戦として戦われる近代戦にあっては、政治・経済・軍事の諸領域が一体のものとして認識される必要があった。そこでは当然のこととして、これらの諸領域の総力を

あげての戦争指導となるはずであった。

しかし、日本の戦争指導の場合には、目先の勝利獲得にとらわれて、作戦指導のみが一人歩きする事態を生んだ。参謀本部の作戦参謀たちは、国家総力戦の観念が最も必要なときに、そうした考えをもとにした戦争指導の運営という点にはさほど関心を示さなかった。その点では、軍政を担当してきた陸軍省サイドの軍事官僚の方が確かな総力戦認識を持っていたといえる。

作戦指導を担当したのは参謀本部の第一部長であり、それを補佐する作戦課長であった。問題は、その第一部長が、本来は軍事と政治の総合として進めるべき「戦争」指導まで担当するという構造が定着していたことだ。その戦争指導を、本来作戦用兵を主任務とする参謀本部第一部長が専務したことは、日本の戦争指導が近代戦への対応能力を欠く大きな原因となった。

たしかにこの時期、参謀本部には戦争指導課が設置され、総力戦への対応からする戦争指導への提言が行なわれてはいた。しかし、それも結局は、ことごとく無視されていった。こうしたことから、日本の戦争指導は、作戦至上主義の傾向をその特徴とした。参謀本部や現地軍の作戦参謀が、実質的に司令官や指揮官以上の権限を振るうという事態の背景には、こうした作戦優位の戦争指導体制があったのである。

したがって、辻の一連の行動は、日本の戦争指導体制のもつ特徴を抜きにしては理解できない。辻個人の資質もさることながら、それ以上に、辻のような作戦参謀が縦横に活躍でき、またそれを規制できない日本の軍事機構に問題があったということだ。その意味で、辻は日本軍のそうした特質が生みだした典型的な作戦参謀といえよう。

❖シンガポール華僑の虐殺

ノモンハン事件の失敗の責任も問われず、辻はその二年後、太平洋戦争が開始されると、シンガポール攻略作戦を担当した第二五軍（司令官・山下奉文中将）の作戦主任参謀となる。開戦当初から、陸軍は、このシンガポール攻略を最重要作戦と見なしていた。ここを手に入れれば、イギリスを東南アジア地域から排除でき、石油・ゴム・錫（すず）などの戦略資源を確保して長期戦を戦い抜く基盤をつくることができるからだ。

この作戦に、辻は自らを売り込んで、そのポストに就く。これには、陸軍大臣・東条英機をはじめ軍首脳のほとんどの支持があった。軍首脳たちは、すでに辻のノモンハンでの失敗を不問にふしていたのである。

新たな活躍の場を与えられた辻は、攻略作戦の全般にわたり、作戦指導と、例によって現場指揮を行なう。作戦は日本軍の完全な勝利に終わり、イギリス軍は降伏し、シンガポ

ールは陥落する。一九四二（昭和一七）年二月一五日のことである。この作戦は、辻の戦歴のなかで最もはなばなしく、彼の評価をいっそう高めることになったとされている。

しかし、シンガポール占領後、日本軍に抵抗の意志を示したとする同地の華僑を大量虐殺する事件に、辻は深く関与していた。辻は、司令官・山下奉文の承認のもとに、華僑のうち日本軍に反抗する者を「敵性華僑」と称し、実際には無差別の華僑狩りを繰り返していく。

華僑虐殺に、辻が率先して手を下していたことを示す証言がいくつかある。たとえば、シンガポール河東岸の大西分隊検問所を視察したとき、大西覚憲兵中尉の「現在まで容疑者検挙は七〇名」という報告に、辻は、「なにをぐずぐずしているんだ。もっと能率よくやらんか。おれはシンガポールの人口を半分に減らそうと思っているんだ。そのつもりでしっかりやれ」と命じたという（生出前掲書）。

また、戦前日本に留学し、戦時中日本軍に徴用されて第二五軍司令部で勤務した体験をもつ劉果因氏は、軍司令部で山下司令官や辻が、「シンガポールの華僑は皆殺しだ。シンガポールだけじゃない、とにかくこの南洋から華僑を一人残らず追い出せ」と命令しているのを何度も耳にしたという（中島正人『謀殺の航跡』）。さらに劉氏は、辻について次のような証言を行なっている。

「華僑粛清計画の青写真を描いたのが彼であることはっきりしています。山下は、むしろそれに乗っかったといったほうがいいかもしれません。とにかく辻という男は、近くで見ていてもまことに好戦的な性格でしてね、たえず華僑粛清の方法ばかり考えているような男でした。それも残忍な方法でね、徹底的にやっつけることに何か狂信的な快感を抱いていたフシがあります。こうした辻の計画に山下や憲兵隊の将校達が同調して、無差別の殺戮になったと私は見ています」(同前)

辻としては、自らの作戦指導で占領に成功した同地で、治安を乱す可能性のあると見た華僑の存在に警戒心を抱いていたのであろう。また、同地の有力な華僑たちが中国本土における抗日運動への物質的・精神的援助をつづけていた事実も我慢ならなかったのであろう。あるいは、作戦が勝利したことへの驕りと、日本軍の威力を示すための恐怖政治の一環であったのか。

戦後、何冊かの著書を刊行した辻であったが、この事件については一言も触れていない。

※「バターン死の行進」との関係

シンガポール陥落の二カ月後、辻は攻略作戦の成功が認められて参謀本部の作戦課に復

帰し、ついに作戦班長に就任する。辻の絶頂期である。上司にあたる作戦課長は、終始、辻の作戦参謀としての能力を買いつづけた服部卓四郎大佐であった。

この在任期間中にも、劉氏の証言にあった辻の「残忍で好戦的な性格」が遺憾なく発揮される事件が起きる。フィリピンにおけるバターン攻略作戦の結果生じた、いわゆる「バターン死の行進」である。

このときまでに日本陸軍は、第二五軍が早ばやとシンガポールを陥落させ、第一六軍（司令官・今村均中将）もジャワ・スマトラを落とし、第一五軍（司令官・飯田祥二郎中将）もビルマのラングーンを占領していた。ところが、第一四軍（司令官・本間雅晴中将）は、フィリピンのマニラ湾西側に突き出たバターン半島と、その先四キロの海上に浮かぶコレヒドール島に立てこもるアメリカ・フィリピン連合軍（約七万人）を相手に苦戦していた。

これを見た辻は、作戦班長補佐の瀬島龍三少佐をともない、第一四軍の作戦指導に加わるためマニラに出向く。結局、五月七日（一九四二年）にようやく米比連合軍は降伏するが、そのとき七万人の捕虜をどうするかが大きな問題となった。日本軍は、米比軍の捕虜と、同地に避難していたフィリピン市民の合計九万人を、同地からマニラ北西六〇キロにあるサンフェルナンドまで炎天下、約八〇キロも徒歩で移動させることにした。

この四日間の行軍の途中で、捕虜たちには、十分な食料も与えられず、また傷病兵への

看護が十分行なわれなかったこともあって、約三万一千名もの死者を出すことになった。戦後、マニラの軍事裁判で「死の行進」の最高責任者として本間司令官が死刑の判決を受けることになったこの事件にも、辻の意見が強く反映されたフシがある。辻は一貫して、国際条約によって決められた捕虜の正当な権利を無視し、それどころか殺害までも指示していたのである。

フィリピンの作戦に参加していた第六五旅団歩兵第一四一連隊長・今井武夫中佐は、旅団の高級参謀松永梅一中佐から、「各部隊は手元にいる米比軍投降者を一律に射殺すべし」とする命令を受け取ったという。戦後、今井は、「あの命令は、辻政信参謀が口頭で伝達して歩いていた」と証言している（今井武夫『支那事変の回想』）。

このほかにも、辻は軍政の障害になると予測されたフィリピン政界の有力者などの処刑命令を次々に発したという。参謀本部の作戦班長とはいえ、処刑命令を独断で発すること自体、明らかな越権行為であったことはいうまでもない。こうした辻の捕虜取り扱いの姿勢が、結局は、「バターン死の行進」という忌まわしい事件を生みだす背景となっていたのである。

❖ガダルカナル飢餓地獄の作戦指導

真珠湾奇襲によって日米開戦に踏み切った日本海軍は、次の戦略目標として、開戦当初には計画していなかったハワイ・オーストラリア攻略作戦を計画し、陸軍の協力を要請していた。真珠湾への奇襲攻撃で米空母群の補足撃滅に失敗していた海軍は、この機会に米空母群を作戦海域におびきだし、一挙に決戦に持ち込もうとした。この作戦の一環として、ソロモン諸島の南端に位置するガダルカナル島をオーストラリア攻略の前進基地とし、いったんは飛行場の建設に成功する。

一方、陸軍は中国戦線で行き詰まりを見せていたが、マレー・シンガポール・フィリピンの軍事占領後は、アメリカ軍の対日反攻作戦への対応策に着手する必要があった。それで、陸軍は米軍の対日反攻作戦の前進拠点としてオーストラリアの重要性が浮上すると見て、海軍との作戦調整の結果、米豪遮断作戦を実施することになる。

ところが、日本軍の企図を察知した米軍は、一九四二（昭和一七）年八月七日、海兵第一師団を基幹とする一万三〇〇〇名（最高指揮官・バンデングリフト海兵少将）の兵力を、ガダルカナル島および同島と隣接するツラギ島へ上陸させ、完成直後の飛行場の奪回に成功する。米軍はこのとき、海兵隊を主軸とする陸海軍を一体化した水陸両用作戦を採用していた。

米軍は、ミッドウェー海戦以後、巻き返しの反攻態勢に移り、中部太平洋における日本

軍の最先端基地ガダルカナル島への上陸により、対日反攻の第一歩をしるそうとしていた。これを起点として米軍は、中部太平洋諸島の日本軍を逐次制圧し、最終的に日本本土攻撃による戦争終結の見通しを立てていたのである。

ガダルカナル島が米軍の手におちたことで、中部太平洋地域における最重要基地ラバウルの防衛も危険になっていた。ところが大本営陸軍部は、この時点でも、米軍の同島地域への進出を対日反攻作戦の本格化とは受け取らず、同地域における日本軍事力の力量を試す、いわば武力偵察と見ていた。そのため、米軍の上陸兵力も小規模と踏んでいた。

その判断から、同島奪回のために四個大隊からなる一木支隊（隊長・第二八歩兵連隊長・一木清直大佐）二〇〇〇名を派遣することになり、まず先遣隊の九〇〇名を八月一八日に上陸させた。米軍の作戦意図をまったく見誤った、兵力の〝逐次投入〟という作戦ミスの始まりである。

ガ島に上陸した一木支隊の先遣隊は、待ち伏せしていた圧倒的な火力を装備する米軍によって全滅させられ、つづいて一木支隊の主力も、米軍の火力の前になすすべもなく壊滅的な損害を受ける。一木隊長は、その責任をとる形で自決してしまう。以後、川口支隊（隊長・歩兵第三五旅団長・川口清健少将）の後続部隊が飛行場の攻撃に向かったが、次々と敗北を重ね、第一回目の奪回作戦は失敗に終わった。

これを見た大本営は、初めて第二師団（師団長・丸山政男中将）を基幹とする師団単位の兵力投入と補給体制の本格準備による奪回作戦を練り直すことになる。参謀陣も、大本営からの派遣参謀を含め、従来の三名から一一名に増員されることになる。この派遣参謀の一人に、辻政信中佐がいた。

第二回の総攻撃は一〇月二四日の夜襲をもって開始された。当初は火力と兵力の大量動員をもってする正面攻撃が計画されたが、揚陸中に米軍の空襲を受けて作戦変更を余儀なくされてしまったのである。ここでも再び、米軍の圧倒的火力を前に、日本軍の〝伝統的戦法〟である夜襲の採用により活路を見い出そうとした。前回の攻撃と同様のパターンが繰り返され、当然のごとく惨澹たる結果に終わった。翌一九四三年一月二六日、第一七軍司令官・百武晴吉中将は、ようやく攻撃中止の命令を発令した。

こうして、太平洋戦争の中でもとりわけ凄惨な結果をもたらしたガダルカナル奪回作戦は終了するが、この中でもまた辻の〝強気〟が必要以上の犠牲を生みだした形跡がある。

一木支隊につづいて川口支隊の攻撃も失敗に終わったあと、一九四二年九月二七日、参謀総長・杉山元大将は、川口支隊の攻撃失敗を天皇に上奏した。同時に、第二師団のガダルカナル島への派遣と、第三八師団の第一七軍への編入の裁可を得る。ここに、ガダルカナル島奪回のための第二回攻撃が決定した。

このとき、大本営陸軍部で師団単位の兵力投入による奪回作戦を強硬に主張したのが、作戦部長の田中新一少将と作戦班長の辻であった。戦力班長の高山信武中佐は、服部や辻に向かって、制海・制空権を持たない地域での作戦続行は兵力輸送や弾薬・糧食の補給維持が困難であり、むしろ主防衛線付近での作戦が有利である、との合理的で常識的な見解を示して反対の論陣を張った。

しかし辻は、高山の見解を敗北主義と一蹴し、まったく耳を貸そうとしない。辻は、米軍の戦略も兵力規模の検討もせず、必勝の信念をもってすれば米軍の撃滅は容易である、との根拠のない観念にとらわれていたのだ。九月二五日、ラバウルの第一七軍司令部に赴任した辻は、第二師団投入にともなう海軍の輸送船団護衛を海軍に依頼するため、第八艦隊司令部やトラック島の連合艦隊司令長官・山本五十六大将に面会し、海軍側の協力取り付けに成功する。

一〇月に入り、丸山師団長率いる第二師団が、つづいて百武・第一七軍司令官がガダルカナル島に上陸し、本格的攻撃態勢をととのえようとした。しかし、弾薬・武器・食料が揚陸の途中で米軍機の空襲を受け、大損害を出していた。そのため日本軍は、当初予定していた戦力をかなりの程度下まわるかたちとなっていた。しかも、二二日を期して飛行場占拠を目的とする総攻撃の準備に入ったが、航空写真の結果、米軍の防御網は予想以上に

堅固であることが判明していた。

それにもかかわらず、基本的な作戦計画の変更はなく、第二師団を右翼隊と左翼隊とに分けて一挙に米軍撃破の作戦を強行しようとした。ここで、右翼隊を率いる川口少将は、作戦成功の見込みのないことを訴え、作戦の一部修正を求める。しかし、作戦変更による攻撃時間の遅延と作戦自体への信用を失うことを恐れた辻は、川口の具申を受けつけなかった。

結局、川口はその職を罷免されることになるが、それは辻の師団長への進言によるものと思われる。というのは、辻はその著作『ガダルカナル』の中で、川口を侮辱的な言葉で批判しているからだ。このように辻は、いったん決定した作戦計画は、途中で状況の変化があってもいっさい変更しようとせず、ひたすら作戦遂行に邁進する。その硬直した姿勢が、日本軍兵士の犠牲を必要以上に大きくしていったのである。作戦の途中変更や中止は、辻にとってメンツに関わる問題であったのだ。

第二師団を投入し、夜襲を多用した攻撃も、結局、左翼隊の隊長・那須弓雄少将と予備隊長の広安寿郎大佐が戦死し、主力の第二九連隊長・古宮正二郎大佐も行方不明となり、指揮官を失って総崩れとなった。作戦は失敗に終わる。ここで、さすがの辻もいったん攻撃中止を戦闘指令所に進言し、再起を図ることにした。このあと大本営陸軍部は、あくま

で奪回に固執して新たな陣容をととのえ、再び奪回作戦計画を発動していく。ここでも辻は、大本営陸軍部の意向を忠実に守っていたのだ。

一一月に入り、田中新一作戦部長の意を受けた服部作戦課長が第一七軍戦闘司令所に派遣され、大本営陸軍部はあくまで奪回作戦継続の意向であることを伝える。田中—服部—辻のラインが、奪回作戦を強引に継続しようとしていた。そしてこの作戦には、東条英機首相（陸軍大臣兼任）の強い支援があった。

しかし、作戦継続のため、第三八師団（師団長・佐野忠義中将）を投入した新たな攻撃作戦も、上陸時点で早くも頓挫した格好となり、この時点で辻の強硬論もようやく影をひそめていく。年が明けて一月七日、辻はガダルカナル島を後にしてラバウルとトラックに立ち寄り、二〇日に東京に帰着した。ガダルカナル島奪回作戦の経過を報告するためである。

この時点で辻は、内心敗北を認めていたが、それは公言しなかった。自分自身のメンツへのこだわりもあったろうし、弱気な姿勢を絶対見せまいとする辻の強気な性格もあったろう。

辻は、大本営への報告のなかで、事実上の奪回断念の意志を表明する。敗北ではなく、「断念」したというのだ。ところが田中作戦部長は、依然として作戦続行の意志を変えず、

ようやく撤収の意向を固めていた東条首相と対立し、更迭されることになった。辻の帰着と田中の更迭で、一月八日の大命により奪回作戦の放棄と撤退が決定されたのである。

二月に敢行された撤収作戦の結果、餓死寸前の兵士を含め、約一万六〇〇〇名が救出されたものの、田中や服部の意向を受けた辻の強引な作戦指導のため、このガダルカナル島奪回作戦に投入された日本陸海軍兵士のうち、戦傷病死と行方不明を加え実に約二万四〇〇〇名もの犠牲者を出すことになった。海軍では、兵員のほかに、艦艇五六隻（駆逐艦一九隻を含む）と航空機約一〇〇〇機も失った。

※〝辻参謀〟を生んだ日本軍の体質

いったいどうして、このような誤った作戦計画が実行されたのだろうか。しかも、作戦途中で、その無謀さとずさんさが実証されていたにもかかわらず、なお続行され、必要以上の犠牲を出す結果になったのか。一言でいえば、日本軍の特質のなかにひそむ問題のためだ。

まず、陸軍と海軍の対立の問題がある。天皇制国家は、その国家諸機関相互の分立性・分権性を大きな特徴としており、そのなかで統帥機関と行政機関の分立が日本の政軍関係にさまざまな対立と矛盾を生みだしていた。その統帥機関のなかでも、陸軍と海軍とは同

じ軍事機関でありながら、機構上まったく平等・対等の関係に置かれ、両者を統合するのは唯一天皇をおいてほかになかった。

そのため、戦時に大本営という統合司令部的機関を設置はしたものの、実際の戦争指導の面では、陸海軍がそれぞれ別個の指揮系統を最末端の部隊まで維持することとなった。その結果、陸海軍共同作戦として実施されたガダルカナル島奪回作戦は、太平洋戦争史上でほかに類を見ないほど陸海軍の統一的運用と緊密な連絡体制が要求された作戦であったにもかかわらず、現地で展開する陸海軍部隊の協同を一人の指揮官に委ねる方式が採用されず、両者間で種々の対立が生じていたのである。

このことが、結局は、現地部隊の大局的視野に立った作戦遂行への可能性を失わせ、辻の作戦構想に代表されるように、目先の勝利にとらわれて現地動員部隊の戦力や継戦能力の総合性への配慮を欠いたまま、いたずらに戦力の消耗を繰り返す結果に陥っていく第一の原因となった。

第二の問題として、陸軍の〝用兵思想〟の特質が、この作戦でことごとく発揮されたことであろう。極端な精神主義を根幹に置く用兵思想から、防御戦を無視した歩兵の白兵突撃が重視され、夜襲や包囲といった日本軍独自の前近代的な戦法が多用されることになる。

そうした作戦を採用したのは、当時日本の軍需生産能力に大量消耗を強いられる長期の総力戦を遂行できるだけの力がなかったからである。それが、砲兵火力の充実や軍隊の機械化・機甲化などへの立ち遅れとなって表われもした。ここからも、作戦参謀には、大規模な火力を用いた近代戦闘を重視するよりも、果敢な戦闘精神を強調するタイプが理想とされたのである。辻が、うってつけの作戦参謀として脚光を浴びつづけた本当の理由が、ここにある。

そのことをよく示している一例を挙げておこう。

辻は、奪回作戦の中止を繰り返し主張していた戦力班長の高山中佐に向かって、こう言い放ったという。――「偉そうなことを言うな。戦いには機というものがある。兵には勢いというものが大事だ。今や戦機だ。今ガ島を敵の手に委したら、敵に勢いを与えることになる。徒らに数や形に捉割れることなく、必勝の信念をもって敵に食いつくことが大事だ。わが精鋭なる皇軍の精神力の向うところ、なんの恐れるところあろう。貴様に忠告するが、参謀たる者は絶対弱音を吐いたらいかん。退却などという言葉は絶対口に出すではないぞ！」（高山信武『服部卓四郎と辻政信』）

ここには、辻の個性が集約されていると同時に、日本軍の特質そのものが見られるだろう。こうしたことから、「餓島」を演出した責任は、辻一人に着せられるものではない。

それは、日本軍の特質と、そうした日本軍を生みだした近代日本国家そのものに発するものである。

さて、辻は敗戦時には第一八方面軍参謀としてバンコクにいたが、戦犯に指名され、処刑を恐れて逃避行する。華僑虐殺や「死の行進」などの責任者として、第一級の戦犯に指名されることは、辻本人がいちばんよく知っていたのであろう。しかし、一九四八（昭和二三）年五月、身を隠してひそかに帰国する。

その二年後、戦犯を解除されるや、こんどは国会議員に当選し、「自衛中立論」を説く軍事専門家として活動を開始する。そのバイタリティーと変わり身のはやさは相変わらずであり、まさに、戦前戦後を通じて「波瀾万丈」の人生であった。しかし、その視野狭窄と蛮勇とで国家の命運をもてあそび、多くの兵士（兵士もまた国民の一人である！）の生命を無駄死にさせた、一軍人の「波瀾万丈」に、拍手を送るわけにはいかないのである。